

## 第108回「さんか・さろん」まとめ

・2021年7月20日(火)

・「スローって何でしょう？」

～COV-19 パンデミックを踏まえての

スローライフ・ジャパンを考える～

・中村桂子さん

(JT 生命誌研究館名誉館長)



人間は生きものであり、自然の一部である、と説き続けてきた、生命誌研究者・中村桂子さんが、コロナ禍のいまこそ具体性、独自性のある動きを、とスローライフ活動へこの日提言されました。オリジナルのスライドの一部をここでもご紹介させていただきます。全国から60名以上の方がご参加でした。

※実際は、中村さんはとても丁寧な言葉でお話されているのですが、紙面の関係で、このまとめでは「である」調に変更させていただいております。

この会ではいろいろな方が素晴らしい活動をされていて、私もずいぶん勉強させていただいている。それぞれの活動、その底で何か共有するものがあるかもしれない、ちょっと生意気なことを考え、今日お話しさせていただく。具体的なことをまず2つ、自己紹介のつもりで。

### ■喜多方市の小学校で続く農業の授業



福島県喜多方市。19の小学校に農業科がある。時間割に国語、算数、音楽がある中に農業がある。小学生たちに農業をさせるのは大変だ。よ

く、稲刈り・田植えという農業体験はあるが、それで済んだということになってしまう。でもここは国語を1年中ずっと学ぶのと同じように、農業を考える。小学校に農業科という授業があるのは日本では喜多方だけだ。

これは私がちらっとつぶやいた言葉から始まって、10年以上続いている。これからの子どもたちに何を教えるのが大事かと議論する機会があり、そこでお偉い方たちの間で、全員一致したのはコンピューターと英語だった。これからは絶対この2つと。私もコンピューターと英語が大事じゃないとは思わないが、それだけかなという気がして、「じゃあ、コンピューターでどういうことができるようになるんですか」と発言した。企業の偉い方が、「例えば株価のことなんか分かるでしょう」と。そこで私は、「小学生には畑の蕪の方が大事じゃありません？」と申し上げたら、その時の喜多方の市長さんが農水省の出身の方で「それやりましょう！」って言ってくださった。こういう新しいことをやる時に、教育委員会はなかなか動かないが、喜多方市は見事な動きをした。

具体的には、例えば「今年は〇〇植えようね」ということで、子どもたちが好きな

ものを作っていく。先生は農業を教えられないので、地元のお年寄りたちが張り切って教えてくださる。お年寄りがとてもうまくできるので、子どもたちは尊敬する。これは学校教育と同時に地域と学校の繋がりになり、とても大事と思う。

私は小学校4年生の国語の教科書に、「生きものはつながりの中に」という文を書いていたので、「農業をやるというのは生きものとのつながりを考えることだね」というお話を子どもたちにしたり、一緒においしく昼食をいただいて、というようなことをやっている。



1年が終わると作文を書く。それがとてもいい。まず3年生「ぼくはえだ豆を作りました。・・・シャワーのような水やりがとても楽しかったです。えだ豆に『大きくなれよ』と話しかけました。・・・農業は最高です」。この子は最初に、「やだよ、僕は」なんて言っていた子、1年経ったらこう書いている。ここで大事なのは枝豆に「大きくなれよ」と話しかけている。今の理屈でいえば植物なんか言葉なんてわかるか、だが、1年やっているうちにつ

い話しかけてしまう。

それから4年生。「学校でとれた野菜を家に持ち帰ったとき、家族がすごいねと笑顔を見せてくれました。・・・一生けん命育てれば育てるほどおいしい野菜になり、みんなの笑顔が増えるなんて、野菜作りにはすごいパワーがあると思いました」

5年生「原発事故のせいで・・・せっかく農家の方が苦勞して野菜や米を作ったのに出荷停止になったりしたニュースを何回も見ました。・・・喜多方のお米は安全ですごくおいしいです。・・・福島県へ来る人が増えるといいなとこの米作りで思いました」これは社会科、大人が教えるよりは、風評について自分で考えるようになる。それから6年生。「私たちが育てたあずきを使って赤飯をつくり、1人暮らしのおじいさんやおばあさんにくばりました。泣いて喜んでくれた人もいて・・・その時のことが心に残りました」この子は一生このことを忘れないだろう。

ここでは近くの農家の方たちが、毎朝収穫するお野菜を子どもたちの給食にしている。今いろんなところで行われているが、ここではもう25年前からだ。はじめ文部省に申請に行ったら、「NO」と言われた。お米

#### 会津の郷土料理・行事食も給食に



郷土料理給食

赤飯、こづゆ、にしんとイカの天ぷら、おひたし  
みかん

節分給食

豆ごはん、ざくざく煮、焼き魚(鮭)、大根おろし  
青菜のごまあえ、福豆

は指定のモノを買わなくてはいけない。「そんなことやるなら補助金は出さない」と。普通引き下がるが、喜多方がすごいのは教育委員会と市と保護者が、3分の1ずつお金を出して、補助金がなくてもやった。給食には会津なので会津塗を使っている。子どもたちは普通の漆器は扱えない、だから子どもがガチャガチャやってもいい漆器を作った。私もこれを買って、持っているが、とってもいい。

### ■豊岡市では「コウノトリ育む米」を

兵庫県豊岡市。あるとき洪水があって、子どもたちの家が浸水した時に、近くの人にとっても親切にしてもらった。子どもたちは人に何か親切をするっていうことはとても大事だと気づき、自分たちも何か親切にしたいと考えた。その相手がコウノトリ。学校の前の田んぼを借り、農薬を使わないで田んぼをやった。コウノトリの食べるドジョウなどが田んぼに来るように、魚道を造った。普通に造ると25万円かかる。子どもたちはびっくり仰天、でもどうしてもやりたいからと製材所へ行って「板ください」とか・・・大人は子どもたちだけでできるわけではないとみんなで手伝ってくれて、魚道ができた。

コウノトリもたいしたもので、ちゃんと



子どもたちがつくった田んぼに来てくれた。思いがけずお米がとれた、このお米だってちゃんと活かさないといけない、と。当時の中貝市長のところへ乗り込んでいって、「作ったお米を給食に使ってください」と交渉した。「コウノトリ育む米」といって、普通より高い。市長はすごく頑張っていて、給食にこのお米を使うようにしてくれた。

子どもたちが面白いのが、図に乗って、じゃあコンビニでも扱ってもらおうと、コンビニの店長さんの前で、「僕たちはこうやってお米をとった。これ扱ってください」とやったのだけどこれは失敗だった。

結局子どもたちがここから得たのは、「つながりの中に自分がある」。そのつながりは、人とのつながり、ほかの生き物ともつながっている、ということ。これ教えたのではなく、子どもたちが自分たちで書くと言って書いたものだ。

## つながりの中に 自分がある

- ・人とのつながり
- ・他の生きものとのつながり

### ■生きる力は素敵な笑顔

このような活動に積極的でない文部省が、子どもたちにどんな力を育てたいか、という指導要領に重要と書いてある言葉がある。〈生きる力〉、子どもたちに生きる力をつけるのが教育の目的と文部省が書いている。でも難しいことが書いてあって、生きる力

ってなにか私には全然わからない。ところがこの両方の子どもたちと接していて、生きる力ってこれだと、今は確信をもつ。あの「すてきな笑顔」だ。あの子たちは、それまでなかったような素敵な笑顔になった。それから「自分で考えて行動する」。おじいさんが上手にやっている、どうして？と、おじいさんと一緒にやって教えてもらう。種をどうしようかと交渉もする。そして、表現、コミュニケーションも。先ほどの作文がとっても素晴らしかったと思うが、コンピューターが大事と言っていた企業の方たちにこの話をしたら、「こういう人物がいたら我が社で採用します」と。やはり農業やらなければいけませんね、と申し上げた。

毎日新聞が主催で、毎年、日本農業賞というのをやっているが、数年前「日本農業賞・特別部門 食の架け橋賞」というのを、JA たじま（兵庫県）、子どもたちがやっていた「コウノトリ育む米」。そして喜多方市教育委員会。この2つと一緒に受賞した。私この年は大喜びで、授賞式と一緒に参加させてもらい、子どもたちととても楽しい時間を持った。

私は、生きものの研究をしているのですが、農業や子どもなどで皆さんの活動にもちょっと繋がるようなことをやっているの、お仲間に入れていただいているのかなあ・・・、という自己紹介だ。

### ■スローは「生きものの性・歴史性・地域性」

そこでそれをベースにして「スローって何でしょう」というのを私なりに述べたい。科学などという面倒なことをやっているの、どうしてもこのようなことを考える。NHKで「今日は何の日」というのがあるが



今日、7月20日は、1969年アポロが月に着いた日。もう1つは1971年、ちょうど50年前、銀座の三越にマクドナルドの日本店第一号店ができた。あっという間に広がって、銀座店は世界で一番の売上高の店になった。そういう意味では日本は上手に取り込むことをすると思う、と思いつつも、ちょっと考えたい。

スローライフのなかで、一番典型的なのはスローフードだと思う。その反対語はマクドナルドを典型とするファストフード。このことを考えると、具体的にスローのことが考えられる。ファストフードは何か。まずは便利。便利というのは実は機械がお得意なこと。機械が得意なことは時間が早いこと、簡便なこと、手が抜けること。で、一律なものができること。これは実は生きものが一番得意じゃないことだ。生きもの



は時間をゆっくりかけて過程を大切にする。手をかけないとダメ、お花育てるのでも、子どもを育てるのでも手をかけなければできない。生きものに一律はない、多様だ。ファストフードは、機械的。機械に対して、スローというのは生きものの性を考えよう、ということだと私は思う。しかもこれはアメリカから入ってきた。申しわけないが、アメリカは歴史性には乏しい。歴史がとても大事だ。アメリカ主導のグローバルは地域性に乏しい。この「生きものの性」「歴史性」「地域性」というのがスローの基本にあると思う。それは何かと言ったら「文化」となる。

文化はカルチャー。カルチャーは文化であり教養だが、実は耕作、農業、畑を耕すこともカルチャーだ。こっちの方が先だと

思う。畑を耕すこと栽培したりすること。土があってそこには光があって水があって、これが本当の意味のカルチャーのベースだ。子どもとの農業は文化を作ったと思う。

### ■生きものを、“中から目線”で見よう

私の基本的な立場は、「人間は生きもので、自然の一部」。これは私の仕事の話だが、具体的にはこの「生命誌絵巻」を見てほしい。まずはここにもものすごく様々な生きものが描いてある。名前がついているのは180万くらいだが、実際には数千万の生きものがある。特に熱帯林の中にたくさん、とにかく多様である。“多様である”というのが一番大事。多様だけれど、みんなDNAがはいった細胞でできているという共通性がある。多様だけれども祖先は1つ。“みんな共通”



【生命誌絵巻】 協力: 団まりな 画: 橋本律子

の祖先から出た仲間だ。多様であって共通である、ということが生きものを考えるときにとても大事なことだ。また、かつてはバクテリアなんて下等だ、人間が一番と、生きものを縦に並べて、だんだん立派になって行って、下等生物、高等生物としてきた。いまは生物学に、“下等、高等という言葉はない”。

38億年前に祖先細胞があって、そこからすべての生きものが38億年かけてできてきた。すべての命の中にはみんな38億年の歴史がはいっている。しかもそれぞれの生き方をやっていて、アリはアリ、ライオンはライオン、イルカはイルカ、ヒマワリはヒマワリで生きている。どれがいい悪いとか、どれが上・下とかはない。この絵は全部コンパスで描いている、同じ距離にある。生きものをそういう目で見るのが、いまの生きものの見方だ。

スローライフとして考えていただきたいのは、人間が扇の中にいるということ。いま大部分の方は、人間は扇の上の方に居ると思っている。「多様性大事だね」「地球にやさしく」とか、この上に居て言っている。私はそれを「上から目線」という。実際は「中から目線」。スローライフを考えるときは、生きものを“中から目線”で見るという感覚が大事だ。

東日本大震災の時には「絆」という言葉がよく使われた。絆とは、家畜を繋いでおくもので、束縛感がある。今度のパンデミックでは「利他」という言葉で、マスクするのも皆のためという。両方ともいい言葉なのだけれど、やはり自分が先にあるように思う。私たちの中の私、私っていうのはいつだって私たちの中にいるのだ。そうい

う思いで、まず私があるっての利他や絆ではなくて、私たちがあって、私がいる。一番大事なのはまず、私たち生きものというのがあるって、それから人類があるって、日本人があるって、家族やお友達がいて、私がいる、という大きいところから考えることをしたい（一番下には御自身の名前を書いてください）。



#### ■「生命誌から生まれた世界観」

大事なのは世界観を持つことだ。どういいう世界観を持つか、世界観って何か。これは大森荘蔵先生という、素晴らしい哲学者がおっしゃっている。「世界観っていうのは単なる学問じゃない。全生活的なもので、自然をどう見るかにとどまらず、人間生活をどう見るか、どう生活し行動するかを含んでいる。そこには宗教も道徳も、政治、商売、性、教育、司法、儀式、習俗、スポーツもみなはいっている」その中で自分はどう生きるかって考えなさいよ、と先生はおっしゃった。その時に私は、「私たちは生きもの」という感覚での世界観を持った。

# 生命誌から生まれた「世界観」

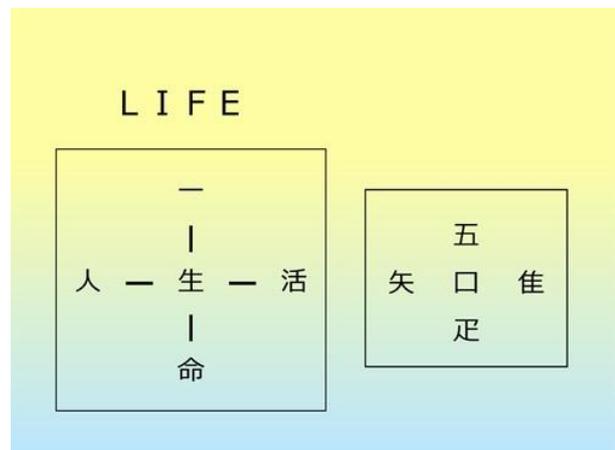
— ヒトとしての「私」、人間としての「私」 —



「生命誌から生まれた世界観」この絵は、お母さんと坊やがいて、周りは今の社会。この鏡に映っている2人を裸んぼにすると実はお猿さんと一緒の仲間。先ほど言った、祖先細胞から始まり、さまざまな生きものが生まれる。恐竜やお猿さんも生まれてきて、その中から2本足で立った人間が出てきて……。自然を強調する方は、左側の生きもの世界だけを強調なさるが、人間はここだけでは生きることができない。しかし右側の現代社会だけでもだめ。このお母さんと坊やは、普段はお洋服着て暮らしているが、実はお猿さんと同じこれだけの長い長い時を持った存在だ、ということ意識して生きていくことが大事だと思う。

■ ライフは生命・生活・一生・人生  
スローライフのライフ「LIFE」はこうし

ませんかと申し上げたい。私が中学1年生で初めて英語を習った時に、英語の先生が LIFE というのはこうやって覚えておけよ、と教えてくださって、ずっとそのように覚えている。まずは「生命」、命。次が「生活」、命があるものがどうやってきちんと生活をしていくか。そうするとそこに「一生」、いろんな生きものには一生がある。ずっとその一生のことを考える、人間の場合はそれが「人生」だろう。





スローライフというのは、命を考え、生活を考え、赤ちゃんからお年寄りまでの一生を、それぞれの時にどう生きるかを考える。人間としては人生を考える。そういうことを考えながら、もちろん一人ひとりの出来ることはそんなに大きくないから、小さなことをコツコツやるのだけれど、その基盤にはいつもこういうことがあったらどうかと思う。

■本地をたづね、愛でる

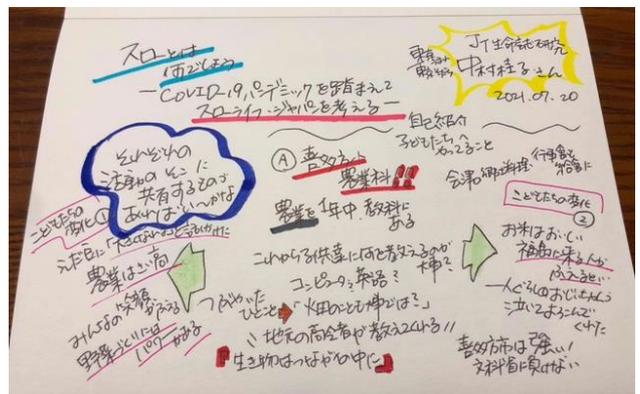
最後に、こういうことを考えるときに私が一番大事にしているのが「愛づる（めづる）」という言葉。『虫愛づる姫君』という今から千年前、紫式部と同じころに京都にいらしたお姫様だ。虫が大好きで、男の子たちに虫を集めさせて、掌にのせて「あら、かわいい、かわいい」と言うものだから、みんなでダメダメっていうのだけれど、このお姫様「これが蝶々になったら、みんなきれいっていうでしょ、だけどね、ほんとに一生懸命生きてるのはこっちの虫よ。その生きている姿をじっとよく見てごらんなさい」と。「本地たづぬる」は仏教用語だが、本質を見るとということ。彼女は「本地をたづぬるなら、この虫の方をよく見て、見か

けではなく、生きているってすごいなと思うと、こんなに愛らしいものはないじゃない」と言う。だから見かけとか、お金がどうだとか、そんな問題ではなくて、本質をみるとそこに生きるということの素晴らしさがあって、それを大事にする。これもスローライフの基本になると思う。

きちんと考えて、自然をよくみて生きるということをやったら、知識という問題とは違って、ほんとに上手に生きる、本当に生きるということが出来るのではないか。そういう生き方をしよう。皆さんのお仕事のお話をこれまで聞いてきて、今日お話ししてきたようなことを、皆さんのお仕事から感じ取ることができる。こんなことを共有しながら、少し広がりをつくっていったらと思う。

38億年は長い……。でも続いてきている。私たちのやることは、続かせていくこと。次の世代に、こんな状況で渡してはいけないのではないか。もう少し生きやすくして渡さなくては、と思う。

.....



※お話を聞きながら参加者が描いたグラフィックレコーディング。



## 【質疑】

●は感想・質問。( )内は居住地。○は中村さんの答え。



●アルバイトで小学生の学習塾にいて、先日授業で生き物のつながりの大切さ、どんな風に

つながりを持っているかを小学2年生に教えました。その授業のお手伝いをした後だったので、すごく貴重なお話で、楽しかった。植物同士であったりとか、動物と植物であったりとか、つながりがひとつじゃない、ということに小学生のみんなは結構驚いていた。塾では座学、写真を見たり、先生の話す言葉でしかわからないが、今日の喜多方市の活動のように、実践的な学びが広がっていったらいい。(東京都)

○お手紙をくれるのは地方の子どもたち。東京からはこない。地方の子は、頭でなく、体で何かを感じる、ということが基本的に身についている。

そのことがないと関心を持つのが難しいのかな、と思う。東京だっていっぱい緑がある、農業でなくても、感覚を養うことはできる。

●東京と二拠点居住、6年前から山に半分住んで、無肥料無農薬で田んぼをやっている。その前は喜多方のオーガニック農家に8年間通っていたので、今日のお話にはびっくりした。東京からの子は虫とかを初めて見る子が多く、親がカエル怖いという、子どももさっきまで平気だったのに怖がる。子どもは大人のリアクションを真似する。自分はすべての生物に話しかけて田んぼをやっている。大人を教育し直さないと、このままではいい方向にいかないと思う。(長野県・東京都)

●お話が心に響いた。兵庫県の姫路の北のハート型のまちの市川町で、15年間棚田



の素晴らしさを伝える活動をしている。子ども140人くらいに田植え体験している。子どもたちに伝えていくのが重要だ。農業は担い手不足、跡継ぎがない、ということで農業、自然の大切さを伝えることがより必要になっている。(兵庫県)

○子どもたちのジャポニカというノート、昔は表紙に虫や花とかがあったが今は昆虫がなくなった。お母さまたちが止めてくれと。親の影響は大きい。人間ってやはり生きものだと思う、どんなに機械の中で育っても、自分が生きものだという感覚をどこかでもっているはず。

最近若い方の中に「世の中おかしいね」「都会では生きにくいね」という方が少しずつ増えている。仕事をして暮らしていかななくてはならないから、難しいが。ただ若い方一人一人が意識をもって少しずつ動いてくださることが、総理大臣が何かを考えるよりは、ほんとに大事なことなのだと思う。若い人たちからそういう動きが出ているので、大人のやれることは、良い芽が出てきたところは育てる、ということだと思う。担い手いない、いない、といていないで、そういうところを応援する役目を、小さいながらも大人たちがやっていくことをやりたい。

●生物とかのイラストレーションが主な仕事。都会は自然があるといっても作った自然なので、あるとは言えないのかもしれない。(東京都)



○自然って決まったものがあるわけではない。地球のいろんなところへ行ったら皆違う。地球は46億年つながってきているが、一度だって同じことはなくて、地球が全部凍ったことだってある。赤道に氷があったという記録が残っている。自然という言葉は常に変わってくるのだと思う。いま、21世紀の現代的な社会でいうと、人の手の入っていない自然はほとんどない。それでいいのだと私は思う。地下道などで、人口の照明で緑を生やしているようなところは、緑もかわいそうだ。

立川の「昭和記念公園」が私は好きだ、昭和天

皇を記念して作ったところ。昭和天皇は「雑草っていう草はありませんよ」とおっしゃった方。本質的な生きもののがわかっていらっしゃる方だ。あそこにはほんとの原っぱがある、芝生ではなくて。芝は日本の草ではない。さすがに昭和天皇を記念したところはそういう意識かな、と思う。もちろん手が入っているわけだが、意識としてそんな風にやっていくことが大切だ。

里山という言葉がある。ほんとの自然、原生林は人間は入れない。人間が入っているいろいろ利用する里山が一番生きものの種類が多い。今森光彦さんという動物写真家が滋賀県の琵琶湖のそばにずっと暮らして、里山づくりをしていらっしゃる。里山ってところが一番多様性があって、生きものたちにとって暮らしやすいらしい。だから、手が入っちゃいけないとは言いきれない。

●新宿区長として仕事をしていた時、皆さん新宿という歌舞伎町とか繁華街のイメージが強いが、私は新宿は多様性を力とするまち、ということで、多くの人たちがそれぞれに生き生き暮らせる街にしたいな、と思った。新宿の歴史や地勢条件を見まわして、石川幹子先生と共に水辺と緑のまちづくりに取り組んだ。新宿は実は新宿御苑、戸山公園、神田川、妙正寺川、外堀の水辺と緑などがある。もっとみんなで大切にできたら、新宿は緑と水辺に囲まれたまちにできるのではないか、という思いだった。また都市の骨格としての道路の街路樹。バチバチ切らないで街路樹の緑量を増やせば、緑は多くなるのでは、と、かなり緻密に「立派な街路樹運動」をした。



私は群馬県の山のまち沼田で育ったので、そのことは大きい。子どもたちに日常の中で自然を感じてほしい。新宿区には、おとめ山公園というのがある、徳川将軍家の鷹狩の場だったところを住民の願いが結実し、武蔵野の記憶を残す緑地となっている。隣地の公務員宿舎敷地を国が100億で売り出したときに買って、公園として繋げた。走り回れる原っぱ、カブトムシが当たり前、という体験を皆ができるように。お話をうかがっていて、体で感じることで、都会の子供でも経験、体験ができるような仕組みを、今後も何かやっていけたらと思う。(東京都)



●中村さんのファン、3年くらい前にNHKの「視点・論点」という番組でお話を聞いて以来。人の進

展が速く、一生のうちに処理できないうちに次の世代にバトンタッチしていかなくてははいけない。そのスピードが速すぎて、果たしてこのスピードに対応していけるのか。人としての進化はそのうち止まってしまうのでは、と心配している。人の将来はあるのか。次の世代の子どもたちは生きづらい世の中になってくるのではと思う。(新潟県)  
○技術は一つではない。例えば政府が原子力とずっと言っていたのが、どうも太陽の方が安くなる、というようなエネルギー政策を出した。やっぱり太陽使おう、というようにこれからなっていくだろう。ただし、この間の熱海の土石流で、そばにあったのがメガソーラー、樹を伐ってソーラーを造っていた。これはナンセンスだ。ソーラーといえばいいわけではない。

お日様の一番大事なことは遍在していること、どこにでもあるということ。だから、使うときはなるべく小さく使う、というのが原則だ。生きも



のから考えたらそれは当然だ。今までの技術者は、大型にして経済的にやろうという計算があるからメガソーラーになる。メガソーラーをやろうと思うと場所がないから樹を伐ってしまう。そこがナンセンスだという感覚を持つ人を上の方に置かないと、危険な将来になる。ちゃんと考えれば、お日様をもし使うのだったら、それぞれの家がお湯を沸かすのが一番だ。皆が考えるようになったら、私は、将来はあると思う。そうでないまま突き進むと、ちょっと危なくなる。

●子どもの田んぼ体験などをやっている。教育の部分に入っていくと、ルールというか、弊害がいっぱいありすぎて、給食も含めて腹の立つことばかり。京丹後市ではいま給食は7割くらい地元の供給というシステムに15年位かけてなってきた。教育現場とは喧々諤々、現場とは喧嘩で。実は地元でもメガ風力発電を造ろうとしている。コウノトリは隣町だが、鳥類にしたら自然体系が壊れてしまう。個々の小さな意識をきちんと持たないと、人間としての生き物の部分が無くなってしまふのかな、と今日は感じた。(京都府)



●私ども十勝なので、農産物を中心に給食につかっている。いまコロナ禍でより地元のモノを消費

しようとしている。まちづくりの一環としてはワイン事業を60年近く前から始めている。町内の

中学生が授業の一環でブドウ収穫を体験。町の成人式で、新成人たちは中学生時代に自分たちで摘み取ったブドウで造られたワインをプレゼントされる。進学、就職で町を離れる若者も多いが、ふるさとの味を授業で覚える、そんなきっかけになっている。(北海道)

●“中から”というところをもう少し知りたい。  
(神奈川県)

○今のやたらに大きくするとか、一律にするとか、これ全然生きもの的ではない。生きものというのは多様だ。300年くらい前にヨーロッパで科学という学問が出た時に、生きものを支配するという概念が出てきた。それ以来の近代の社会は、思い通りに支配するということができた。「支配する」というのは上から目線。中にいて「いろんな生きものがあるね、あれもすごいね、これもすごいね、これうまくつかったらいいね」と、よろしく願いしますという感覚で生きものたちの能力を使っていく、それが上からではなくて「中から」。

極端に技術の中だけとか、緑の中だけとかで生きていく、暮らそうという人も出てくるが、それは人間らしくない。人間の能力は生かさなければいけない、けれども生かすときに支配的になるのではなくて「仲間として、私はこういうことやりたいんですけど」という感じできると、樹をやたらに伐ることはやらないだろう。森は素晴らしいとそのままにおいておくのではなくて「私たちが生きていくためにここはこのように使います」という感じで、ある意味相手と話し合いながらやっていくことが大切だ。何も聞かない、何言っても



聞かない、というような傾向に今あるのではないだろうか。あちらの言うことも聞きながらやりませんか、ということだ。

●人間同士もそうだと思う。中村さんが育てられた小学生を、もっと飛躍させるために、高校生を地域創生と結び付ける、という動きが出ているということだ。文科省の高校魅力化プロジェクトという。例えば能登高校では地域に塾がないというので、公民館でその代わりをやったり、地域の魅力とか産業とか、地域をよく知るといふことも。また徳島県上山町では、丸ごと地域を知るために上山高等専門学校をつくる。これらは非常に面白い話かと思う。小学、中学と体験などしていったら、高校生に着目すると面白いと思った。(神奈川県)  
○私は農業高校が大好きで、農業高校応援はいろんな形でやっている。これは普通の高校と違って先生と生徒の関係がとても密で素晴らしい。農業高校は本当に大事にしたいのだけれど、いま減らされている。とてもいい教育をしている農業高校がつぶされている。これも訴えなくてはいけないし、喜多方みたいな小学校の農業科ももっと増えてほしい。

●いま、生命の絶滅の速度がすごく速くなっている、と聞いたことがあって、その生命の絶滅ということと、人間の活動がもっとスローであることの関係性って何かあるのか。(東京都)

○関係性は大きいにある。もちろん自然界での絶滅というのはあるわけで、絶滅しないものはないけれど、いまの絶滅はスピードが速すぎる。それはなぜかという、人間の活動が速すぎるから。スローはただゆっくりするというのではなくて、生きもののペースになる。生きものというものは時間が必要。

赤ちゃんは生まれてすぐには学校に入れない、でもロボットは可能。その必要とされている時間をよく知って、それに合わせた人間の生き方をす

る、というのが人間が生きものだという生き方だ。私のスローは「生きものの時間」ということだ。そうすると今起きている絶滅も、ほかの生き物たちももうちょっと幸せになれるだろう。



●最近、環境省が有機農業の比率を25%まで上げる、というようなことを出した。やっとかと喜んで

いたが、よくよく聞いたらゲノム編集の作物を有機として認証して、それをやることで有機栽培とする、というようなのを聞きショック。中村さんが90年代に書かれた『物語としての生命』で、その当時はゲノムにすごく期待していらっしかったが今は？（東京都）

○自然というものは変わらないものではない。遺伝子というのは、これでなんでも決まっているというような教育を受けがちで、遺伝子って変わらないと思っているが、遺伝子もどんどん変わる。遺伝子は生きもの全部で共有している、人間の遺伝子というのはない。例えば食べたものを消化しようとしたら、犬も猫もアリも皆同じやり方で消化している。1970年ころは、生物学者でも遺伝子のそういう基本的なことが分かっていなかった。遺伝子が生きもの間を動いているということも。

そういうことを理解した上で、全体の動きを生きもののスピードに合わせる、という感覚をみんながもって、大きいよりは身近なスモールの方をきちっと大事にしよう、という感覚を持った上でゲノム編集ということをやった作物を使うということは有りだと思う。考え方だ。一番典型的なのは太陽、ソーラー。ソーラーはいいに決まっている、でもメガでやったのではだめ。だからゲノム編集での作物もどう使うか。全部NOというものではない。太陽光ダメという人は誰もいない。で

も樹を伐ってあのようにやるのはダメと思う方は多い。問題はそこだ。

農業も同じで、やり方次第。きちんとお話しするのは時間もかかり、難しいが、一律にしないで、全体をうまく変えた上で使っていく。農水省もやっと「グリーン」という言葉を使い始めたところなので、みんなでチェックしていかなくては行けない。ご心配はよく分かる。長い目で見たときに、ゲノムはダメと今言い切ってしまうことだ。.....スローとは、ライフとは、この日私たちは活動を進めるための一つの“ものさし”を示していただいたように思います。中村さんと参加者との話し合いは、この後も続きました。またいつか、お話を伺いたいものです。終了後、佐賀県からご参加の方からおなじみのグラレコが届きました。すべて掲載できず残念です。ありがとうございました。

（記録：事務局 丸山 薫、野口智子）

